

19世紀転換期のエジプトを総覧する - 『エジプト誌 *Description de l'Égypte*] -

はせぶみひこ
長谷部史彦
(文学部教授)

『エジプト誌』（『エジプト誌、或いは、フランス軍遠征期間に為された観察と研究の集成』）初版（フランス帝国／国立印刷所刊、1809-28年）は、エジプトのフランス占領期（1798-1801）にフランス人学者・技師たちが実施した大規模な現地調査の成果である。同書の刊行は、実際にはフランス第一帝政期の1810年に始まり、復古王政期の1829年に完結をみた。この度、本学三田メディアセンターに新たに収蔵されたこの初版本のセットは、エレファント版（70.2cm×106.8cm）3冊（地図篇、古代篇、図版混在）、グランド・アトラス版（53.4cm×70.2cm）11冊（序文・古代篇解説1冊、古代篇図版5冊、博物篇図版3冊、当代篇図版2冊）、フォリオ版（25.4cm×40.7cm）18冊（古代篇研究報告5冊、博物篇研究報告7冊、当代篇研究報告6冊）から成る。

既に本図書館には、初版の古代篇図版3冊とパンクーク第2版の博物篇図版3冊及び古代篇研究報告10冊が荒俣宏旧蔵博物誌コレクションの一部として所蔵されているが、この度の収蔵により、彩色画（図1）を数多く含む千点近い銅版画とエジプト及びパレスティナの詳細な大判地図を備え、かつ、極めて良好な保存状態の初版全巻を自在に活用し得る研究環境が、遂に慶應義塾に整ったのである。

イタリア戦役（1796-97）に勝利した若きナポレオン・ボナパルト（1769-1821）は、エジプト遠征という野心的な挑戦を総裁政府に認めさせた。インド洋と地中海の間に位置する大河ナイルの地は、対仏大同盟で最強の海軍力を誇り、インド支配を特段に重視するイギリスにとって地政学上の要地であった。この侵略はまた、エジプトでの交易活動で苦境に陥っていたマルセイユの商業勢力の熱望にも後押しされていた。1798年5月、ナポレオンは3万6千人を超える大軍を率いて南仏の軍港トゥーロンから船出し、手始めにマルタ島を聖ヨハネ騎士団から奪い、7月1日にアレクサンドリアの郊外に上陸すると、このナイルデルタの要港を占領した。当時のオスマン帝国エジプト州は、イエニチェリ軍を基盤に強大化した軍事集団カーズダグリーヤの支配下にあった。その頭領であったジョージア人マムルーク出身のムラード・ベイ（図2）とイブラーヒーム・ベイの二頭体制は、イスタンブルの巨大帝国からの自立化傾向を強めていた。ナポレオンはピラミッドの戦いでカーズダグリーヤを主体とするエジプト州軍を破り、7月25日に州都カイロへ進軍し、エズベキヤ池の畔の高級住宅地に占領軍の本部を構えた。以後、フランス軍は占領地域を広げ、翌年2月までにアスワンを南限とするエジプト全土を制圧した。



図1 デンデラのハトホル神殿の柱



図2 ムラード・ベイの肖像画

ナポレオンは出征の直前、イタリア戦役時に親交を深めた高名な数学者、理工科学校教授のガスパー・モンジュ（1746-1818）の協力を得て科学技芸委員会（Commission des sciences et des arts）を組織させた。そのメンバーを中心に167名にも及ぶサヴァン（学者と技師）を連れてエジプトに乗り込み、カイロの占領軍本部の北側のハサン・カーシフ邸（図3）を接收し、そこにエジプト研究所（Institut d'Égypte）を創設した。数学・物理学・政治経済・文芸の4部門から成る同研究所は、現地調査と「啓蒙」の拠点となり、モンジュが所長、ナポレオンが副所長を務めた。組織的な学術調査と軍事的支配の一体化という点で、それは近代コロニアリズムに特徴的な統治戦略の先駆例といえよう。

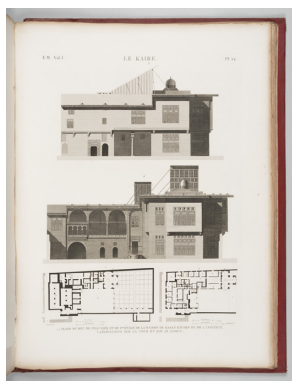


図3 ハサン・カーシフ邸

フランスの占領とエジプト研究所は、イギリスとオスマン帝国の連携により3年間で終幕を余儀なくされるが、軍を後ろ盾にした綿密な科学的調査は植民地支配の長期の持続を想定しての事業であった。撤退時にロゼッタ・ストーンなどの貴重な収集物がイギリスに横取りされたが、膨大な調査記録や標本類はパリに持ち帰られ、皇帝ナポレオンの命を受けて『エジプト誌』という特大の果実を結んだ。エジプト遠征が軍事的には失敗に終わったため、代わりにナポレオンはその学術的成果の豪華な開示を切望したのである。

国費による『エジプト誌』の編纂は、内務省所管のエジプト委員会（Commission d'Égypte）が担った。そこで実際に刊行を最後まで主導したのは、理工科学校の恩師モンジュに従って弱冠二十歳でエジプト遠征に加わった測量技師、エドゥム・フランソワ・ジョマール（1777-1862）であった。モンジュ

は1799年夏、ナポレオンと共に早々と帰国したが、ジョマールは調査団の一員として占領の終了までカイロ城やギザのピラミッド、アスワンに至るエジプト各地の調査を続けた。その活動は測量や地図の作成に限られず、たとえば『エジプト誌』当代篇に「中部エジプトのアラブ部族の考察」、古代篇に「都市テーベの玄室群の記述」といった研究報告も寄せている。

ジョマールは『エジプト誌』刊行の末期に、エジプトからの派遣留学生団の受入と教育にも尽力し、付き添いの礼拝指導者としてパリに長期滞在した啓蒙思想家のタフターウィー（1801-73）を助け、親交を深めた。『エジプト誌』の編集主幹は、両国間の学術交流の草創期に枢要な役割を果たしたのである。

『エジプト誌』の古代篇（Antiquités）はエジプトロジー（近代的エジプト学）の輝かしい出発点とされ、博物篇（Histoire naturelle）の動物学・植物学・鉱物学史上の意義も大きい。だが、同時代史料としての当代篇（État moderne）の貴重な価値は見落とされがちである。18世紀から19世紀への世紀転換期におけるエジプト各地の社会や文化の実態に関する仔細な研究報告の内容的精査、そして、建築物・人々・情景を描いた多様な版画の図像史料としての解析は、未だ大きな課題といえる。

たとえばカイロについては、周辺部の主要な建築物ばかりが丹念に描出され（図4）、中心部旧市壁内（カーヒラ）の図像は意外にも少ない。旧市壁内は、「ファランジュ」、すなわちフランス軍の支配に抗う二度の大規模な民衆反乱とその弾圧の主舞台であった。それゆえに、サヴァンたちには腰を据えた調査や記録が難しかったのであろうか。さらなる検討の余地がある。 請求記号 [144Y@14@32@1~32]



図4 巨大マドラサのハサン学院